Osaka University Knowledge Archive

Title	教育コミュニティづくりのグループ・ダイナミックス
Author(s)	諏訪, 晃一
Citation	大阪大学, 2006, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/46621
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【8】

氏　　名	諏訪晃一（すわこういち）
博士の専攻分野の名称	博　士（人間科学）
学位記番号	第　19960　号
学位授与年月日	平成18年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 人間科学研究科人間科学専攻
学位論文名	**教育コミュニティづくりのグループ・ダイナミックス**
論文審査委員	（主査） 教授　堤　修三 （副査） 教授　中村　安秀　　助教授　渥美　公秀

論文内容の要旨

近年、「地域の子どもは地域で育てる」といった類のスローガンが、各地で用いられるようになった。社会の変化を受け、実践面では、大阪府において全中学校区に「地域教育協議会」が設置されるなど、学校と地域の関係を見直そうという動きが広がっている。

本研究では、教育コミュニティづくりについて、大阪府内での実践を事例とし、グループ・ダイナミックスの観点から考察した。ここで、「教育コミュニティ」とは、「学校と地域が協働して子どもの発達や教育のことを考え、具体的な活動を展開していく仕組みや運動のこと」（池田、2005、p.11）である。一方、グループ・ダイナミックスは、「集合体の全体的性質（集合性）の動態を研究する人間科学」（杉万、2001、p.641）である。その結果、「物語」が教育コミュニティづくりの中で重要な役割を果たすことが示された。

以下、本研究の構成を述べる。第1部（第1章・第2章）では、本稿全体を貫く教育コミュニティづくりおよびグループ・ダイナミックスの理論を整理した。第1章では、学校と地域の関係に関する日米の研究の動向を概観した。ここでは、一部の例外を除いて、現象を記述することに重きを置いた研究が中心を占め、実践的な場での活動に向けた理論的な知見の発信が十分ではなかったことを指摘した。そして、「教育コミュニティ」という概念を提出することによって、実践現場での活動の展開を促した池田（2001、2005）の教育コミュニティ論について検討した。ただし、教育コミュニティ論の課題として、教育コミュニティの必要性についての議論が中心を占め、教育コミュニティづくりを展開する方法についての理論が不十分であることを示した。

第2章では、グループ・ダイナミックスにおける研究の枠組みを確認するとともに、近年、グループ・ダイナミックスで注目を集めてきた「物語」に関する議論を整理した。語りや物語に関する研究の多くは、語りそのものの型や性質を明らかにしようとするものが主流を占め、語りや物語が実践場面でどのような役割を果たしているのかということについての分析は、必ずしも多くはない。また、一部の研究は「物語」を実践的な場面で生成することで、集合性を変容させる試みを行ってきているものの、多くは研究者による強力な介入や特殊な機器を必要とする事例についてのものであるので、介入や機器がない、より日常的な場面でも展開が可能な実践の方法について、検討が求められる。そこで本研究では、グループ・ダイナミックスの枠組みのもとで、教育コミュニティづくりにおける物語の役割について検討することを目的とした。

第2部（第3章・第4章・第5章・第6章）では、大阪府内各地の実践について整理した。第3章では、松原市立

松原第七中学校区における地域教育協議会の実践について、「センスメーキング」（Weick、1995）についての議論に基づき、整理した。ここでは、教育コミュニティづくりを進めるにあたっては、センスメーキングが重要であることを指摘した。また、センスメーキングや物事に対する解釈を通して、「物語」が構成されていると捉えることができることを示した。

第４章では、大阪府田尻町における実践について、「原風景」（呉、2001）についての議論に基づき、整理した。教育コミュニティづくりは、地域の共同性を構成する営みという側面を持つ。地域の共同性を構成するために有力な方法の一つとして、現在の地域社会において、過去の地域社会について共同で語り合い、想起することが挙げられる。過去の地域社会について共同で語り合い、想起する営みは、すなわち原風景を構成する営みでもある。原風景を構成する営みを可能にするための条件として、過去について共同で思いを巡らすよう働きかけることと、そういった働きかけが可能になるような場を用意することがある。教育コミュニティづくりとは、原風景を共に想い描く営みでもあると捉えることができる。

第５章では、茨木市立郡山小学校区における実践について、岡田・河原（1997）が提唱した概念である「ハビタント」の、教育実践の中での妥当性について考察し、学校・家庭・地域の協働を進める上での校長の役割についての知見を得ることを目的に議論を展開した。そして、校長を地域への外部参入者、すなわちハビタントと見なすことは十分妥当であり、教育コミュニティづくりを展開するにあたって、学校の管理職がハビタントとして地域に関わることが重要であることを指摘した。

第６章では、松原市立布忍小学校での実践について、「自己物語」（浅野、2001）についての議論に基づき、整理した。ここでは、布忍小学校の「総合的な学習の時間」で行われていることは、子どもたちの個々の自己物語を、周囲の子どもや、学校外の大人が受け入れる実践であると理解できることを示した。そして、教育コミュニティづくりを展開するにあたって、「総合的な学習の時間」の中で、自己物語が語られることが、学校の取り組みを地域に開く際の契機となりうることを提示した。

第３部（第７章）では、第１部の理論に基づきながら、第２部の各事例を統合的に理解するための視座を提示した。教育コミュニティづくりにおいて、物語はローカルで生成的な〈道具〉（矢守、2005）としての役割があり、ローカルで生成的な〈道具〉としての物語によって、教育コミュニティづくりに偶有性（大澤、1990；2004）がもたらされ、活性化に道が開かれる可能性があることを示した。教育コミュニティづくりをより豊かに展開するためには、各地域でそれぞれにローカルな物語を紡ぎ出していくことが求められよう。

浅野智彦 2001 自己への物語論的接近：家族療法から社会学へ．勁草書房．

池田寛 2001 学校再生の可能性：学校と地域の協働による教育コミュニティづくり．大阪大学出版会．

池田寛 2005 人権教育の未来：教育コミュニティの形成と学校改革．解放出版社．

呉宣児 2001 語りからみる原風景：心理学からのアプローチ．萌文社．

岡田憲夫・河原利和 1997 交流時代における中山間地域の外部者参入過程に関する実証的研究：ハビタント概念の例証．実験社会心理学研究．37(2)，223-249.

大澤真幸 1990 身体の比較社会学Ⅰ．勁草書房．

大澤真幸 2004 帝国的ナショナリズム：日本とアメリカの変容．青土社．

杉万俊夫 2001 グループ・ダイナミックスの理論．中島義明（編）現代心理学［理論］事典．朝倉書店．pp.641-659.

Weick, K. E. 1995 *Sense making in organizations.* Sage Publications. 遠田雄志・西本直人（訳）2001 センスメーキングインオーガニゼーションズ．文眞堂．

矢守克也 2005 防災とゲーミング．矢守克也・吉川肇子・網代剛 防災ゲームで学ぶリスク・コミュニケーション：クロスロードへの招待．ナカニシヤ出版．pp.2-18.

論文審査の結果の要旨

本論文では、教育コミュニティづくり関する大阪府内での実践の事例が、グループ・ダイナミックスの観点から考察されている。まず、学校と地域の関係を巡る従来の議論の課題、及び従来のグループ・ダイナミックス研究の課題を抽出した後、それらの課題を踏まえて、四つの事例が記述されている。さらにこれらの事例を理論的な観点から整理した後、四つの事例を総合的に理解するための理論的な視座が提供されている。

本論文については、四つの地域の事例を豊かに描き出すと共に、それらを理論的観点から適切に整理したこと、さらに、これらの事例及び理論的な整理について、「物語」という観点から総合的に理解することが可能であることを示した点が、高く評価できる。これらは、学校と地域の関係に関する研究及びグループ・ダイナミックスの研究に新たな可能性をもたらすものである。

以上の理由より、本論文は、博士（人間科学）の学位の授与に十分に値するものであると判定された。